学校現場から悲鳴が聞こえる

第２５回「障害のある子たちとかかわる寄宿舎指導員」

今回は県内の特別支援学校にある宿泊を伴う教育の場、「寄宿舎」で指導員として勤めるＦさんから、仕事内容や当面する課題、やりがいなどを伺いました。

記者　最初に特別支援学校についてお聞きしたいと思います。

Ｆさん　以前は盲学校、聾学校、養護学校といわれていたこれらの学校は、２００７年の法改正によって特別支援学校へと一本化されました。その特別支援学校とは心身に障害のある児童・生徒が通う学校で、幼児部・小学部・中学部・高等部があります。基本的にはそれぞれの部は通常の学校に準じた教育を行っていますが、それに加えて障害のある児童・生徒の自立を促すために必要な教育を受けることができるのが大きな特徴です。私は寄宿舎指導員をしていますが、寄宿舎を利用する生徒も少なくありません。

記者　特別支援学校に通う子どもたちの寄宿舎とはどういうものですか。

Ｆさん　目・耳・肢体・知的に障害のある子どもたちがいます。小学部から高等部まで入ることが可能で、男子棟、女子棟に分かれて生活をします。集団で生活をしていますが、先輩が後輩の面倒を見たり、後輩は先輩の行動を見て学ぶことがあり、先輩は後輩の手本となるように行動しています。

記者　寄宿舎指導員の仕事とはどういうものですか。

Ｆさん　それぞれの棟に職員が分かれて在籍し、１日に一人が宿直として子どもたちと一緒に宿泊をします。遅番や早番という勤務があり、ローテーションで仕事をしています。その仕事ですが、子どもたちの日常生活の世話をすることです。具体的に言えば家庭と同じで子どもたちがただいまと帰ってくるところから仕事は始まります。その流れを言葉で表すと下校後着替え、服をたたむなどのロッカー整理、宿題やゲーム、遊びなどの余暇支援、夕食の配膳や食事支援、入浴支援、布団敷きなどの就寝準備です。朝になると起床後に身支度、洗面、歯磨きなどの支援、掃除支援、朝食の支援、そして着替えて学校へ送り出します。

記者　複数の子どもたちを支援しているわけで大変な仕事ですね。

Ｆさん　指導員は、先ほどの日課を行うことが難しい子どもたちを手伝いお世話をすることが仕事です。身だしなみや食事をとること、排泄、体を清潔に保つことなど自分のことは自分で出来るようにする。つまり日常生活がきちんと一人でも送れるようにしてやれることが仕事だと思っています。

記者　そのような仕事をするうえでどのような問題が出ていると思いますか。

Ｆさん　昔は特別支援学校の数が少なかったために、遠方から通学する子どもたちが多くいました。毎日通うことが困難で、通学の保障という理由から寄宿舎ができていますが、今は交通機関の発達やそれぞれの地域に特別支援学校ができたことや、小学校・中学校にも特別支援学級

ができてきたということで学校全体の児童・生徒数が少なくなり、それに伴って寄宿舎を利用する子どもたちが少なくなっています。そのことで職員の削減という事態が起こっています。

記者　子どもの数が減ってきたという理由で寄宿舎職員を削減されることは影響が大きいのですか。

F さん　仕事内容のところでも触れましたが、ローテーション勤務であるため、夜は一人になります。一人で１０人程度の子どもたちを見なければならないために、安全面が最優先となる夜間に十分な支援・指導ができているかというと不安もあります。

　また、寄宿舎の場所が障害を持つ子どもたちの親や学校関係者にあまり知られていないということもあり、寄宿舎の見学を取り入れたり、途中入舎という制度を作ったりして一定の成果を出していますが、子どもを送りだす保護者や学校関係者の期待に応えるためにも職員の数は増やして欲しいです。職員が増えればもっと障害の程度が重い子どもたちを受け入れることが出来ます。最近は重度の子どもたちの保護者からの入舎希望が多いですが、夜は職員が一人になってしまう等の理由で受け入れが難しいです。職員の数が増えれば保護者のニーズに応えられると感じています。

記者　寄宿舎生活の中で子どもたちの成長を感じることはありますか。

F さん　寄宿舎では同じ学年や同じ学部だけでなく他の年齢の子どもたちが集団で生活しています。先輩・後輩という子ども同士のかかわりで、押し付ける支援ではない自然な形で子どもが成長しているように感じます。これが寄宿舎の不思議なところであり、大きな存在意義です。

記者　子どもたちへの指導やかかわりで、もどかしく感じたことや、やりがいを感じたことはありますか。

F さん　子どもへのかかわりでは信念というか指導法の違いというか、人によっては自分のやり方を押し付けてくる人もいますが、校長はじめ上司はよく話を聞いてくれます。やりがいは何といっても自分の思いが伝わった時や子どもが大きく成長したと感じた時は自分自身の指導員としての明日への活力に変わります。寄宿舎という場は現代の世の中の子どもたちのために必要な場所であり、貴重な経験ができる場所であると思っています。この場所が無くならないで欲しいと思っています。

記者　子どもたちが日々の生活のなかで日常生活の習慣や社会生活技術を身に付ける場として、指導員が学校や家庭とはまた違った面でかかわり、子どもの成長に果たしていることがわかりました。

　一方で寄宿舎指導員にかかわる制度面では様々な改善が必要という研究もあるようです。紙面の関係で触れられませんでしたが、どの子にもゆきとどいた教育をすすめるためにも教育予算の充実は重要な課題となっています。